

「2016年度フィールド実習（インド）報告」

実習担当教員 八木祐子

1. 実習の概要

2016年度の実習は、12月16日～30日の15日間にわたり、北インドで、1～4年生の19名の学生が参加しておこなった。本実習の目的は、ウッタル・プラデーシュ州にあるヒンドゥー教の聖地ベナレス(ヴァラナシ)で調査実習をおこない、また、インドの首都であり、北インドの中心都市であるデリー、アグラにあるイスラム教の聖廟タージ・マハル、ラジャスターン州の州都であり、藩王国の中心地であったジャイプールの街いどう異なる文化背景をもつ都市を訪れることにより、南アジアの文化や社会についての理解を多面的に深めることにあった。

12月16日に、仙台から新幹線と成田エクスプレスで移動し、夕方の飛行機でデリーに向かった。17日の未明にデリーに到着し、18日は、ラクシュミー・ナラヤン寺院、インド門、国立博物館を見学した。18日の飛行機で、ベナレスに移動し、アンケート調査を手伝ってもらうバナラス・ヒンドゥー大学（以下、BHUと略）のチューターさんとグループごとに打合せをおこなった。BHUの日本語学科の鈴木千晶先生の指導のもと、日本語を学ぶBHUの12名の学生が、2～3人ずつ各グループについてもらった。19日～21日は、BHU内のヴィシュワナート寺院の中庭やショッピング・モールなどで、グループごとにアンケート調査をおこなった。22日は、釈迦が最初に教えを説いた所転法輪の地であるサルナートを訪れ、仏塔などの仏教遺跡やサルナート博物館を見学した。夕方にベナレスに戻り、サリーなどの買い物をしたり、ベンガリー・トローラーなどの小道を散策したりして、夜は、ガンジス河でガンガー・アラティという礼拝をボートから見学し、ガンジス・クルーズをおこなった。23日は、チューターさんとアンケートについて、それぞれのグループでチェックをおこなったあと、夜には、お世話になった鈴木先生やチューターさんたちを招いて、ミン・ガーデンという中華料理の店で、交流会をおこなった。学生たちはサリーに着替え、チューターさんも民族衣装で着飾り、食事を楽しんだり、プレゼントを交換したりとにぎやかな交流会となった。最後は、別れを惜しんで、学生もチューターさんも涙を流す場面もあり、感動的な交流会となった。





24日の朝の飛行機で、ヴァラナシからデリーに向かい、昼食をショッピング・モールでとった後、バスで6時間近くかけて、アグラに移動した。夜は、クリスマス・ディナーを楽しんだ。25日の午前中に、アグラ城とタージ・マハルを見学した。学生たちは、ムガル時代の壮麗な建築とインド人観光客の多さに圧倒されていた。昼食後、バスでジャイプールへ6時間かけて移動した。27日の午前中は、象に乗ってアンベール城を観光し、天文台やシティ・ホール（博物館）などを巡り、マハラジャのつくった街のきらびやかさと、イスラム教とヒンドゥー教の2つが混交した美しさを堪能した。昼食後、風の宮殿や旧市街でのバザール見学とショッピングを楽しんだ。風邪や疲れ、油っこいものの食べ過ぎにより、体調をくずす学生がでたが、薬を飲んで休むと回復したので、大きなトラブルはなかった。

28日は、ジャイプールの名産であるハンド・プリントの作業工程の見学や旧市街の観光をおこない、夕方には巨大ショッピング・モールにある映画館で、「Dangel（レスリング）」というアミール・カーン主演の映画を2時間半、楽しんだ。実話にもとづいたヒンディー語の映画であったが、感動して泣いた学生もいた。夜は、民俗舞踊をみながら、夕食をとり、最後にはサリーを着て、一緒に民俗舞踊を踊って楽しんだ。29日の朝からバスで6時間かけてジャイプールからデリーに移動した。夕方は、デリー中心部のコンノート・プレイスで買い物をしたり、コンビニにでかけたりした。30日は、いくつかのグループが一緒になって、カーン・マーケットやチベタン・ストリート、エンポリウムなどで買い物をしたあと、夕方、全員で食事をして、夜遅くの飛行機でデリーを飛び立った。30日の午後に成田に到着し、夕方、仙台に、無事、帰着した。



2. 実習の総括

本実習では、19人の学生が5つのグループに分かれ、インド実習講義の授業をつうじて、テーマを設定し、アンケートを英語で作成した。3年生4人で構成されたAグループのテーマは、「インド人の信仰」、3年生3人のBグループのテーマは、「インド人の健康観」、2年生1人と3年生3人のCグループのテーマは、「インド人の“美”」、3年生1人、4年生2人、1年生のDグループのテーマは、「食文化の変化」、2年生3人のEグループのテーマは、「学生事情」である。ベナレスで、チューターさんが熱心に手伝ってくれ、各グループが約100名のインドの方々にアンケートをおこなうことができた。アンケート調査の結果分析を含めた実習の成果については、『インド実習報告書』に詳しくまとめている。

実習をつうじて、学生たちは同世代のチューターさんや現地の人とふれあい、貴重な経験をすることができ、インドの社会や文化についての理解が深まったと思われる。日を追うごとに、チューターさんに頼らず、自分で英語やヒンディー語を使って、アンケートをおこなうように頑張ったり、地元の人たちとコミュニケーションをとるようになったりと、学生たちの成長を実感できた。1年生から4年生までの学生が参加し2学科合同の実習だったが、非常に仲良くなり、互いに協力しあって実習をすすめる様子が見られた。帰国後、「インドにまた戻りたい」「ベナレスに留学したい」という学生たちも多く、かなり充実した実習になったと思う（実際、この後、2人の学生が、1年間、留学した）。

引率に同行してくれた市野澤先生の的確なサポート、BHUの日本語学科の鈴木千晶先生の事前指導、チューターをつとめてくれたBHUの学生のみなさん、アヌープ・シャルマ氏、ベナレスでのコーディネーターのパリック・ショービ氏、ミントウ・マノージ氏、イーバ・カフェのラチタさんなどの協力のおかげで、実習がスムーズにすすんだ。感謝を申し上げたい。

